

韓国では、大人の信者同士が互いの名前を呼ぶ時、相手の名前に洗礼名を付け、そのあとに兄弟様、或いは、姉妹様という敬称をつけます。例えば、わたしの場合は、「姜眞求 ヤコブ兄弟様」という風に呼ばれるのです。一体いつからそのように呼び合うようになったのかはわかりませんが、プロテスタント教会でも同じように呼んでいるので、おそらくずいぶん昔からのことではないかと思えます。とにかく、血のつながりのない人間同士が互いを兄弟姉妹と呼ぶことは、ただ、昔からの慣習だけに沿って、そのようにしているのだとは思いません。

実際、イエス様も兄弟という言葉をよく使われましたし、使徒たちの言行録や手紙などを見ても、初期教会の時代から、兄弟という言葉がよく使われていたことが分かります。勿論、その兄弟という言葉は男性だけでなく女性も表しています。考えてみたら、ユダヤ人の間では兄弟という言葉が自然に使われたはずですが、でも、使徒パウロは異邦人に向かってもためらわず兄弟と呼びました。つまり、イエス様の受難と復活を信じて、神様の子供となった人たちは皆、互いを一つの家族、兄弟姉妹として認めていたということです。この新しい兄弟姉妹の絆は、人間の血のつながりではなく、イエス様の血によって築かれたものなのです。言い換えれば、その絆の力はイエス様によって示された神様の慈しみと愛であるということです。教会の人たちはただ一つの命、すなわち、神様の永遠の命をいただいた兄弟姉妹となり、その命をイエス様の最後の晩さんの記念であるミサの中で味わいながら、信仰の道を共に歩んだのです。教会の兄弟姉妹という絆はとても大事で、今日もイエス様は福音を通して、その絆を守るために必要なことをわたしたちに教えてくださいました。

今日の福音で、イエス様はいくつかの例えを話されました。まずは、道案内人と修行中の弟子についてのことです。これは、直接的にはイエス様の弟子たちに対する教えのように見えますが、世の暗闇の中で正しい道を示すべき人たち、つまり、信仰のある人たちみんなへの教えでもあると

おも 思います。つまり、^{しんこう}信仰のある人たちは自分が^{あゆ}歩むべき道にしっかりと^た立って、世の中の人たちを
その道に^{みち}導かねばならないということです。そのためには、^{しゅぎょう}修業をおろそかにしても、^{なま}怠けても
いけません。その^{しゅぎょう}修業とは言うまでもなくイエス様を^{まな}学ぶことで、^{せいしょ}聖書の御言葉とイエス様の^{さま}
^{ふくいん}福音の教えをきちんと^{まな}学び、このミサに^{あずか}まじめに与ることです。わたしたちは皆、^{みな}神様の^{こども}子供で
あり、^{きょうだいしまい}兄弟姉妹として^い生きています。ですから、^ま先ずイエス様を^{とお}通して^{しめ}示された^{かみさま}神様の^{いつく}
^{あひ}慈しみと^{ふか}愛の^{まな}深さを^{まな}学ぶべきです。また、^{こども}子供たちにも、^{きょうかいがっこう}教会学校は^{もちろん}勿論、^{かてい}家庭においても、そ
れを^{おし}教えなければなりません。^{こども}子供たちも、この世の中のための^{ただ}正しい^{みちあんないにん}道案内人となるよう^{まね}招かれ
ているからです。そのように^{つと}務めなかつたらどうなるでしょうか。わたしたちは^{つぎ}次の^{たと}例えからその
^{けっか}結果が^わ分かります。

^{きょう}今日の^{さま}イエス様の^{ふた}二つ^め目の^{たと}例えは、わたしたちの^め目にある^{まるた}丸太についての^{まるた}ことです。その^{まるた}丸太と
は、わたしたちがそれぞれ^も持っている^{にんげんてき}人間的で^{せぞくてき}世俗的な^{きじゆん}基準や^{せんいゆうかん}先入観などを^{あらわ}表します。人間は
^{じぶん}自分が^み見たいもの^みだけを見、^き聞きたいこと^きだけを^き聞いたりする^きものです。その^{じぶん}自分が^み見たこと、^き聞
いたこと、^{けいけん}経験した^{こと}に^{こたわ}拘り、それをイエス様の^{いつく}慈しみと^{あひ}愛より^{だいじ}大事にしたら、それらは^{またた}瞬
^{あいだ}間に^{まるた}丸太となつてしまいます。そうすると、^{じぶん}自分だけの^{きじゆん}基準や^{せんいゆうかん}先入観を持って^{ひと}人を^{はんだん}判断したり、
^わ分け^{へだ}隔てしたり、^{つみ}罪でもない^{こと}で^{さわ}騒ぎ^た立てて^{ひと}人を^{きず}傷つけたりする^{こと}のです。それは^{なん}何と^{ぼうじゃくぶじん}傍若無人な
^{たいど}態度でしょう。また、それは、^{なに}何も^み見えないのに^{かしこ}賢い^{みちあんないひと}道案内人のように^ふ振る^ま舞う^{こと}です。そん
な^{たいど}態度は^{きょうかい}教会の^{きょうだいしまい}兄弟姉妹の^{きずな}絆を^{くず}崩し、イエス様を^{とお}通して^{かみさま}神様から^{いのち}いただいた^{うば}命を^{うば}奪ってしま
います。ですから、^ま先ず^{じぶん}自分の^め目にある^{まるた}丸太、^{じぶんかって}すなわち、^{ひと}自分勝手に^{はか}人を^{さば}測ったり^{いろい}裁いたりする^{いろい}色々
な^{ちしき}知識や^{きじゆん}基準などを、^とすっかり^{のぞ}取り除くべきです。そして、^{いつく}慈しみと^{あひ}愛に^み満ちている^{さま}イエス様の^{ひとみ}
^{あお}瞳を^み仰ぎ見ながら、^{きょうだいしまい}兄弟姉妹たちの^{けってん}欠点や^{あやま}過ちを^{あわ}憐れみ、^{たが}互いに^{ささ}支え^あ合いながら^{とも}共に^{しんこう}信仰の^{みち}道
^{あゆ}を^{あゆ}歩まねばなりません。

イエス様の次の例えは、わたしたちの口から出る話や言葉についての戒めです。この例えの中で、イエス様は良い実を結ぶ木と悪い実を結ぶ木について話され、さらに、良いものを入れた心の倉と悪いものを入れた倉についておっしゃいました。それぞれの実を結ぶ木は、人の命に役立つ実を結ぶことによって、そのよし悪しが決まるはずで、いかに良い実のように見えても、人の命に害を与えるものは悪い実でしょう。また、いかに良い実を結ぶ木でも、野原に放置されたようになったら、そんなに良い実には結ばないでしょう。そのように、信仰のある人から出る話や教えは、人の命を支え、また、力づけるものとなるべきです。そのためには、まず、自分の思いや行い、特に、言葉に注意を払わねばなりません。兄弟姉妹を気落ちさせる言葉の代わりに励まし、高圧的な戒めの代わりに穏やかな話を、禁止や規則の言葉の代わりに協力の言葉を口にすることによって、兄弟姉妹の絆は強められます。どんな形でも、イエス様のことや教会のことを教える立場になったら、もっと真剣に考え、話す必要があります。また、自分の心の倉にイエス様の教えだけを入れ、それを愛と慈しみという良い酵母で醗酵させることが大事です。イエス様のすべてを自分の心の倉に納めていても、自分の歪んだ人格や知識、経験が、さながら悪い酵母となって、自分の中のイエス様を腐らせてしまうかもしれません。そうすると、その人の口からは、悪臭だけが漂うはずで、

「死のとげは罪であり、罪の力は律法です。」しかし、命の息吹は赦しであり、その力は愛です。これからもわたしたちがイエス様の血によって繋がれる真の兄弟姉妹となって、イエス様の愛を、わたしたちの思い、言葉、行いを通して証しすることができるよう、お祈りいたします。